えどがわの女性
vol.48
2023年
10月

「奉仕する気持ちは変わらずに」
－PTA・青少年委員・人権擁護委員－

眞田康子（さなだ やすこ）
1942年（昭和17年）
墨田区生まれ
松江在住

人間って孤独だなあ

墨田区の本所吾妻橋に両親が住んでいて、そこで生まれました。隅田公園のすぐ近くです。3歳で終戦です。だから戦争のことは分からないんです。親から聞いた話では山梨県に疎開（そかい）をしていたようです。夏に小川みたいな所で髪を洗った記憶があります。生まれた家は空襲で焼けてしまいましたが、同じ町内に土地を持っていて、そこに終戦後すぐ新しい家を建てました。地域全部が焼けたわけではなくて、周辺には、わたしたちのことばで「焼け残り」っていうおうちがあり、改築しながら住んでいる方もいらっしゃいました。

わたしは、隅田公園の中にある小梅（こうめ）小学校に入学しました。学区域の一番はずれだったので、近くに友達はいなかったですね。小学校の時はちょっと勉強ができて、リレーの選手だったり、洋裁学校へ行き始めていたひと回り上の姉が作った洋服をとっかえひっかえ着ていたりして、すごく皆さんに羨（うらや）ましがられました。みんな下駄をはいて学校へ行っていた時代でしたから、父がどこかで手に入れてきた古い運動靴を履（は）いていくと、それが学級会なんかで、「靴を履いてくるのはよくないと思います」とか、父がもらってきた古い自転車に乗っていたら、「自転車でドッチボールに来るのはよくないと思います」とか。学級会というと、ほんとに嫌な思いをいっぱいして、「人間って孤独だなあ」って思った記憶がすごくあるんですね。理解してもらいたいと思っても分かってくれる人はいない。だから「わたしは私」と思っていました。小学校の時は自分のことしか考えてなかったんだなと思いますね。

中学から青山学院、教師の道へ

一人でいることが多かった小学校時代は、父が時々買ってきてくれた本が面白くて読書が好きになりました。受験をすることになって、5・6年生の夏休みは進学教室に行ってましたね。そんな中で上には上がいるなと知り、自分はそんなに頭がいいわけじゃないなと思いながら、それでも頑張ってやってました。姉が熱心に手伝ってくれて、中学校は私立の青山学院の中等部へ入りました。姉の「青学に入れたい」っていう気持ちが強かったみたいです。それから高等部、大学に進みました。

中等部では聖書の時間が週に1回、礼拝が毎日2時間目と3時間目の間にありました。校長先生のお話を伺ったり、キリスト教のお話を聞いたりしました。人に奉仕するということがいつも話の中に入っていて、人のために祈り、人のために奉仕しなさいって毎日聞くのは、今考えると影響があったと思います。クリスチャンではなかったけれども、ずうっと大学までそういう教育を受けて、自然にそういう気持ちになったんだと思います。青学へ行ってからは人間関係で悩んだってことがないですね。

クラブ活動は中等部が軟式テニス部で高等部は水泳部でした。大学は教育学科に進みました。英文科にしようかとも思ったんですけれど、英語がそんな得意じゃないし、教育学科だったらいろんなことができるかなと思って。

◆「学校で遊ぼう」の風景（裏面参照）
写真中央に立つのが眞田康子さん

東京都の教員試験に受かりました。当時、江戸川区に来る教員がなかったのか、船堀小学校の校長先生が「わざわざ青学まで行って引っ張ってきたんだよ」って、自慢げにおっしゃっていました。そんなわけで船堀小学校へ着任し、最初に受け持ったのが4年生。職員室に帰ってきてはよく泣いていました。3年生まで男の先生だったので、厳しくも楽しくやっていたのが、若い女の先生が来たんで、男子がはしゃいじゃって言うことを聞かなくて。でもその時の子が後にPTA会長になって、創立100周年記念式典で校長経験者でもないのにわたしを呼んでくれたんです。

船堀小でお世話になっていた先生の教え子と結婚しました。彼は30歳になる前に結婚したいと言って、誕生日の3日前の11月22日に結婚式を挙げたんです。今でいう「いい

江戸川区聞き書き研究会

聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

夫婦の日」。新居は松江にあった夫の実家の会社の敷地内。姉夫婦の家が隣で、母屋に夫の両親が3男夫婦と子どもとで住んでいました。区内の松江に越したのは、次女がちょうど小学校に入る頃です。

結婚した翌年に肺炎で入院してしまい、6年生を受け持っていて卒業式には何とか行きましたけれども、その時に妊娠もしていたんですね。わたしは教員を続けるつもりでしたが、みんなに迷惑かけてしまったので辞めてしまいました。

PTA活動から始まって50年

長女が小学校に入って、2年目からPTA活動を始めて、子ども会、青少年育成地区委員、青少年委員と長い間子どもと関わってきました。昭和と今では親が変わったと思いますね、子どもへの対し方が。どちらも同じように愛情を向けているんでしょうけれども、昭和の頃は勤めに出ているお母さんが少なかったですから、時間がたっぷりあって。今は、働いている方が増えて、PTAが無くなった学校もあるんですよ。

江戸川区には17の青少年育成地区委員会があって、わたしは青少年委員として松江南地区委員会に所属していました。青少年委員がリーダー的立場で、江戸川の河川敷で凧揚げ大会、校庭や公園の樹木や花の名前を調べるグリーンアドベンチャーやキャンプなどいろいろやりましたね。新潟の塩沢荘のそばでキャンプをして、地元の子どもたちと交流をしたことも。体育指導員（現、スポーツ推進委員）や子ども会に声をかけて、バスで行きました。また、江戸川区のやっている「すくすくスクール」は他の区にはないですが、それは松江南地区委員会でやっていた「学校で遊ぼう」を元にして始まったんです。公園なんかではボール遊びができなかったので、学校のグランドをお借りして日曜日の午前中だけですけれど、今でもずうっと続いています。

わたしの原点はPTAですけれども、青少年委員になったことが大きいですね。青少年委員というのは、自分たちも研究しながら、教育機関や関係団体と協力して青少年の健全育成のために活動しています。例えば、子ども会の立ち上げをお手伝いしたり、地域のリーダーを育てたり、地域に活動を提案して一緒にやりましょうっていうことなどです。子どもが対象ですけれども、子どもを育てる人たちを育てよう、アドバイスをしようというのが本来の役割なんですね。こうした地域活動がわたしの活動の中心になっています。平成19年（2007年）に区政功労者表彰、平成25年（2013年）に法務大臣表彰、令和元年（2019年）には藍綬褒章をいただきました。

推薦されて人権擁護委員に

趣味は読書です。中学時代は世界文学全集の『狭き門』や『嵐が丘』など。今は養老孟司さんが好きです。読んでいると「そうだそうだ」と分かって、生き方、考え方の参考にしています。でも、高校の時はあまり本を読まず映画ばかり見ていました。学校の帰りがけに渋谷東急や名画座で3本立てを100円で観られるんで、週2回くらい一人で観ました。『エデンの東』やトニー・ザイラーのスキーの映画ですね。中学校の時、浅草の映画館でお祖母ちゃんと東映の時代劇をぎゅうぎゅう詰めで観たのも思い出します。

今は人権擁護委員をしています。主な仕事は人権の相談受付、人権侵犯事件の調査同行や人権の考えを広める啓発活動などで、ボランティアです。私が人権擁護委員になったのは、平成11年（1999年）で、任期は3年。今8期目で、来年（令和6年）3月まで任期があります。江戸川区の人権擁護委員は現在14人おりまして、わたしが最高齢です。

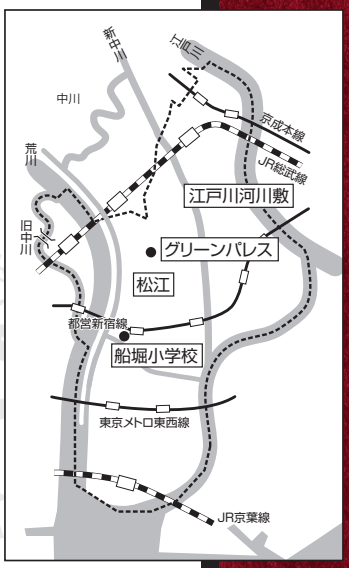
人権擁護委員ってあまり知られてないですね。皆さんに知っていただくために、区民まつりとか地域まつりとかにもブースを出しています。

◆人権教室で話をする眞田康子さん

やなせたかしさん作の人権イメージキャラクター「あゆみちゃん」「まもる君」のマスコット人形が目印ですよ。そこでも相談を受けていますが、「人権相談」は月1回、グリーンパレスでおこなっております。

わたしは、人権擁護委員になって2年目から「子ども人権委員会」に所属しています。中学生に「人権作文」を書いてもらい、小学生には「人権教室」をやったりして、人権という言葉を身近に感じていただけるような活動を中心にやってきました。悩みを人に話すことは、たとえ電話でも勇気のいることなので、相談できたことをまず褒めます。学校では切手を貼らないで出せる手紙「SOSミニレター」を配っていますが、強化週間の時などは都内で1日に100通以上くるんですね。全部に返事を書きます。一番多いのはイジメですね。学年が上がってくると、担任の先生のこととか、家庭内の例えば「いくら勉強しても褒めてもらえない」とか。

困っている子どもの声を拾い上げることが大切だと思っています。そして、相談された時はすぐに答えを出さずに、とにかく話を聞いてあげることですね。傾聴が大事。「人権」という言葉は難しいですが、人の話を聞き、その人を理解することだと思います。



◆インタビュー/2022年11月
/2023年1月
/2023年4月
◆聞き手/小野塚和江、小宮和枝、村田正子
◆コーディネーター/樋口政則

◆お問い合わせ◆
総務部総務課
人権啓発係
☎6638−8089